

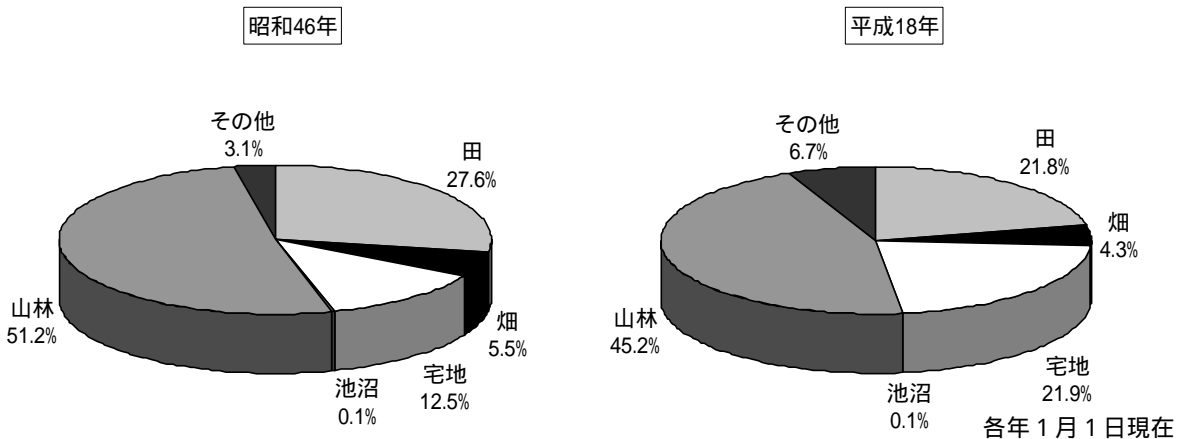
(4) 土地利用

琵琶湖流域や木津川流域など上流域では比較的耕地が多く、下流域では住宅地や商・工業用地が多い。

琵琶湖・淀川流域の平地部では古くから都市が形成されていたが、特に高度経済成長期以降は京阪神地域とその周辺を中心に人口・産業の集積が進み、さらに都市化が進展した。この結果、大都市周辺部では農地から宅地への転用が進んでいる。

琵琶湖・淀川流域における平成18年の土地利用面積を見ると、山林が約45%、田畑が約26%、宅地が約22%、その他が約7%となっている。昭和46年と比較すると山林が6ポイント、田畑が7ポイント減少したのに対し、宅地が約9ポイント増加した。

猪名川は、典型的な都市河川であり、その流域は、阪神地区のベッドタウンとして大規模な宅地開発が行われてきている。



- 1) 集計の対象とする地域は、琵琶湖・淀川流域に一部または全部が含まれる市町村である。
- 2) 課税対象分の土地のみを対象としている。
- 3) その他には原野、牧場、雑種地も含まれる。

【図 1 - 4 利用形態別の土地利用面積】

三重県「平成20年刊三重県統計書」  
 滋賀県「平成18年度滋賀県統計書F.Y.2006」  
 京都府「平成18年京都府統計書」  
 大阪府「平成19年度大阪府統計年鑑」  
 兵庫県「平成17年兵庫県統計書」  
 奈良県統計協会「平成18年度奈良県統計年鑑」より作成  
 詳細は資料1 - 1を参照

(5) 気象

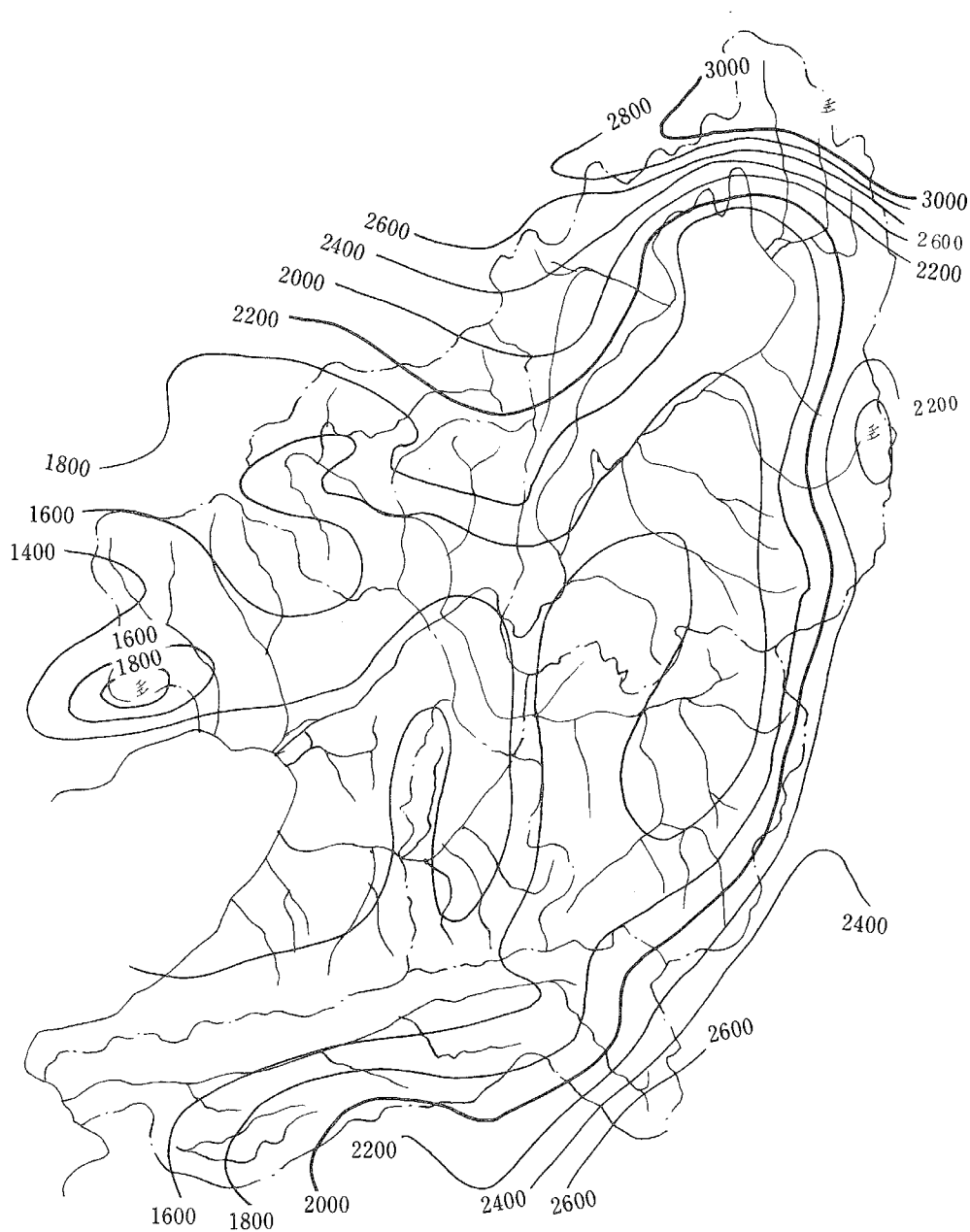
降水量

日本列島は、海洋性の暖気団と大陸性の寒気団が交錯するところに位置するため、気象の変化が激しく、降水量は極めて多い。

琵琶湖流域では、北部の山地は冬季の季節風による降雪の影響で、2,000～3,000mmと流域のうちでは最も多い。主な積雪地帯は、湖西の北小松と湖東の彦根を結ぶ線以北で、最大積雪は1月下旬から2月上旬にかけて観察される。

木津川上流の高見山地から琵琶湖流域東部の鈴鹿山脈にかけては、太平洋型気候の影響を受け、特に夏季は台風の影響により雨量が多く、年間雨量は最大では2,000mm以上にもなる。

琵琶湖南端から京都盆地・大阪平野に至る琵琶湖・淀川流域中央部の低地での年間降水量は1,400mm前後もしくはそれ以下と少ない。



【図1 - 5 年雨量分布図】

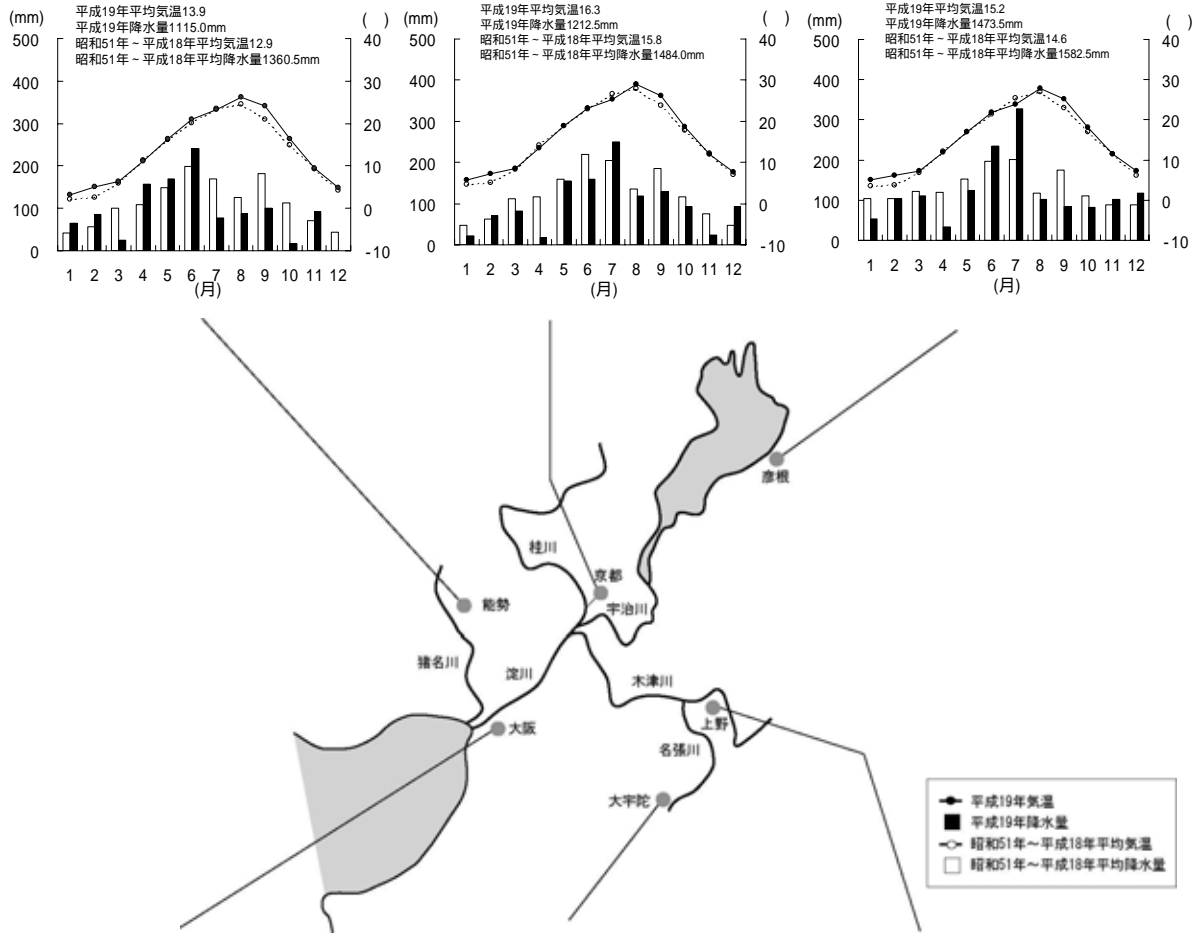
出典：近畿地方建設局「淀川百年史」

### 気温

琵琶湖・淀川流域では、琵琶湖周辺の山地や鈴鹿山脈、丹波山地東部地域など各河川の上流部は年間を通じて気温がやや低く、平野部は比較的温暖な地域が多い。

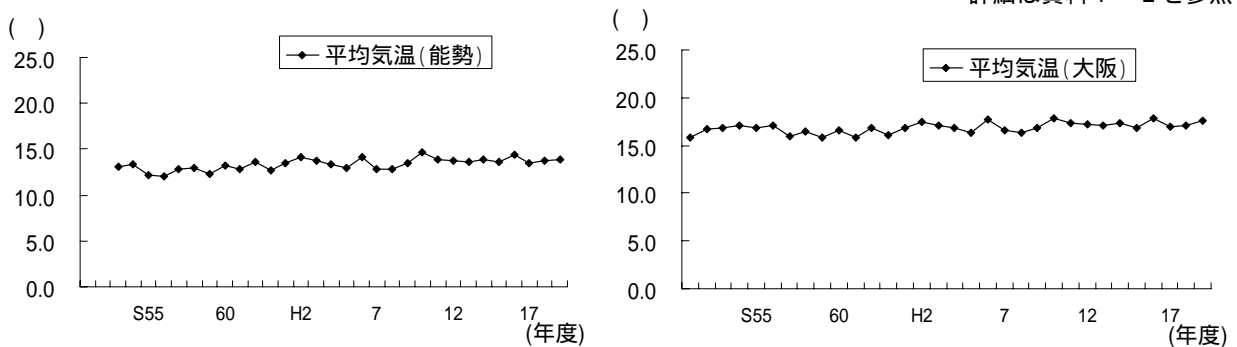
琵琶湖流域の北部は年間を通じて冷涼であり、特に冬季は低温であるが、近江盆地全体としては琵琶湖の影響により寒暑の差は比較的小さい。

琵琶湖南端から淀川本川にかけての平野部は、瀬戸内海気候に近いので、比較的温暖であり、京都盆地の年平均気温で約16℃、大阪平野で約18℃である。近年地球温暖化が危惧されており、琵琶湖淀川流域においても30年間程度で約1℃～2℃程度の気温が上昇し、温暖化の傾向が表れている。



【図1 - 6 代表地点の降水量および気温（昭和51年～平成18年の平均、平成19年）の月別変化】

気象庁気象統計資料より作成  
詳細は資料1 - 2を参照



【図1 - 7 能勢・大阪地点における平均気温の経年変化（昭和51年～平成19年）】

気象庁気象統計資料より作成

洪水・渇水

淀川流域においては、古くから台風の影響等で多くの大洪水が発生してきた。明治時代以降の記録によると、ほぼ3年に1回の割合で洪水に見舞われている。

主要な洪水としては、明治29年（琵琶湖の最高水位3.76m）、大正6年（鳥居川最高水位1.43m、彦根最高水位1.32m）、昭和36年（鳥居川最高水位1.10m、彦根最高水位1.30m）、昭和47年（鳥居川最高水位1.12m、彦根最高水位1.29m）などがある。

琵琶湖・淀川流域の渇水は、多くの場合、梅雨期から夏季にかけて酷暑・干天が続き、さらに台風が少なく秋雨前線の活動が弱いといった気象条件が重なる年に起こる。琵琶湖流域の降水量は下流の流量への影響が大きく、特に淀川本川の渇水は琵琶湖流域の雨量に左右される。また、渇水が長期化し秋季まで続いた場合、冬季の琵琶湖流域の降水量次第ではさらに事態は深刻化する恐れがある。近年では昭和48年、昭和59年、61年、平成6年に大渇水が起こっている。



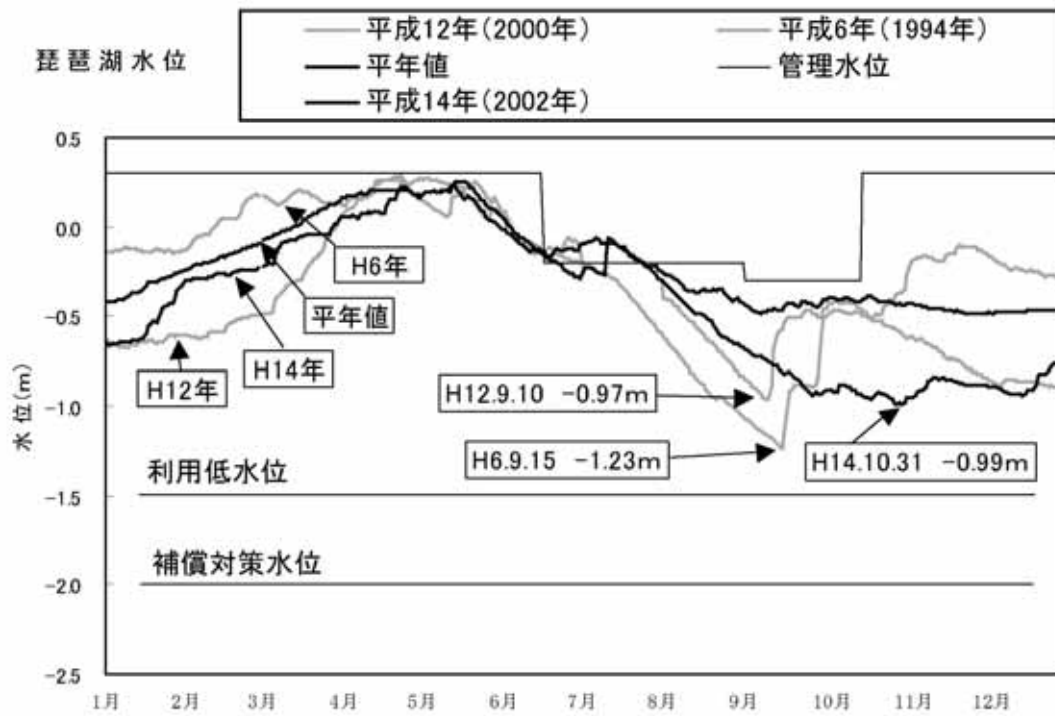
【渇水写真（浮御堂）】

提供：滋賀県

【表 1 - 3 淀川の既往渇水概要】

項目 年	琵琶湖水位(cm)			枚方流量 (m <sup>3</sup> /秒)	取水制限(%)			取水制限期間 (日)			備 考
	最低	-30以下	-50以下		1次 (上水) (工水)	2次 (上水) (工水)	3次 (上水) (工水)	1次	2次	3次	
昭和48年	-54	94日	11日	94.6	10 15	20 25	-	97	1	-	史上初の取水制限
昭和52年	-58	146日	20日	82.8	10 15	- -	-	134	-	-	琵琶湖23日間無降雨
昭和53年	-73	181日	120日	73.3	10 15	- -	-	161	-	-	琵琶湖7.8月の合計雨量 史上最小
昭和59年	-95	191日	124日	68.4	10 12	20 22	-	156	115	-	史上初の第2次取水制限
昭和61年	-88	173日	127日	65.4	10 12	20 22	-	117	61	-	8月の合計雨量少雨 観測史上第3位
平成6年	-123	246日	191日	52.7	10 10	15 15	20 20	44	32	17	年降水量(M27～H6)101年間で 最小
平成12年	-97	107日	50日	データなし	10 10	- -	-	10	-	-	7.8月の合計雨量は99mmで観測 史上第2位、第1位はH6の89mm
平成14年	-99	199日	165日	データなし	10 10	- -	-	101	-	-	琵琶湖水位最低値は、観測 史上3番目の-99cmを記録

注) 琵琶湖の水位0mは大阪湾の干潮位から85.614mの高さ  
水位は平成3年度までは鳥居川水位観測所、平成4年度より湖内5箇所  
(片山、彦根、大溝、堅田、三保ヶ関)の平均  
大阪府「明日の水資源を考える 平成15年(2003年)度版」より作成



琵琶湖水位は平成4年4月から平均水位を公称値としており、本グラフの平年値の算出は平成4年～14年で行った。

【図1-8 過去の渇水年における琵琶湖水位比較図】

近畿地方整備局河川部ホームページより作成